東京外国語大学
留学生日本語教育センター論集　27：79～92，2001

多義語「ツク」（付・着・就・即・憑・点）の意味分析
ーそのスキーマ的意味の抽出と関係付けー

鈴木 智美
（2000.10.31 受）

1　本稿の目的と分析の対象とする範囲

本稿では、動詞「ツク」（付・着・就・即・憑・点）の意味分析を行う。「ツク」という音形をとる動詞には、その補語の名詞句がガ格とヲ格を伴うものと、またガ格とニ格を伴うものの少なくとも2種類のものがあると考えられる。前者は例えば「（私が）キューで球をツク」「漁師がモリで魚をツク」、後者は例えば「服にごみがツク」「電車がホームにツク」という場合のものである。

鈴木（1997）では、前者の「ツク」（突・衝・撞・搗・吐）についての意味分析を行った。本稿では、後者の「ツク」（付・着・就・即・憑・点）(1)を取り上げ、分析を行う。またここでは、「（ひもを引けば）明かりがツク」「（スイッチを入れたら）テレビがツイタ」などに見られるような、ニ格の補語を伴わない「ツク」も含めて考えることにする。また「ざわつく」「うろつく」「がたつく」などに見られるような、擬音語・擬態語の一部に後接する「～つく」という接尾辞はここでは考察の対象に含めない(2)。また「～について」「～につき」という複合辞（格助詞相当句）についても、ここでは考察の対象としない。

動詞「ツク」（付・着・就・即・憑・点）については、これまで諸種の辞書（日本大辞典刊行会編（1975）、金田一他編（1989）、小泉他編（1989）、森田（1989）、文化庁（1990）、見坊他編（1992）、西尾他編（1994）、山田他編修（1995）等）において、その様々な意味が詳細に記述されてきた。しかし、多くの意味が列挙されてはいる(3)ものの、それらの意味の相互の関係については十分な考察がなされてきたとは言いがたい。

本稿では、この「ツク」（付・着・就・即・憑・点）という動詞に見られる複数の意味のうち、相対的にスキーマ的(4)であると考えられるいくつかの顕著性の高い意味を抽出し、それらの意味を相互に関係付ける(5)ことを試みる。それらの意味の間には、互いの結び付きが網の目のようにはりめぐらされていることが予想される。また抽出されたスキーマ的意味をさらに細分化、より特定化し、「ツク」の用例を網羅的に組み込みその関係の網をより詳細にはりめぐらせていくこ

とができれば、「ツク」（付・着・就・即・憑・点）という動詞の意味のネットワーク構造[6]をその細部に到るまで明らかにすることができるだろう。

2　多義語「ツク」（付・着・就・即・憑・点）

2.1　多義性を持つ語か単義語か

本稿では、動詞「ツク」（付・着・就・即・憑・点）には、互いに関連のある複数の意味（多義的別義）があると考える。ある語に対し複数の多義的別義を認める基準としては、それらの意味を取り巻く関連語（反義語、類義語、上位語など）が互いに異なっているかどうか、またその属する意味分野が異なるかどうかを見るというものがある（町田・籾山（1995：110））。

今、暫定的に「ツク」に複数の意味があると考え、この基準に従って考えてみる。まずその意味分野を見てみると、この「ツク」は例えば『類語国語辞典（第七版）』では、「0.自然」という意味分野の中の「09物象－095光-e 明滅」という下位の意味分野、「2.変動」という意味分野の中の「22離合－223接触」また「22離合－224付着」という下位の意味分野、また「3.行動」という意味分野の中の「30動作－302立ち居-b 着席」「38操作-386運搬-c 着荷」という下位の意味分野、また「4.心情」という意味分野の中の「40感覚-401意識」（ただし「気が付く」の例）また「40感覚-402狂気」という下位の意味分野、そして「7.社会」という意味分野の中の「77処世－776出処進退-a 就任(職)・在任(職)・退任(職)」及び「78社交-783同伴」という下位の意味分野など、異なる複数の意味分野に記載されていることがわかる。

またその類義語を考えてみると、例えば「手紙がツク」の場合には「届く」、「列車が東京にツク」の場合には「到る」「達する」、「食卓にツク」の場合には「座る」、「実力がツク」の場合には「備わる」、「勝負がツク」の場合には「決まる」、「差がツク」の場合には「出る、生じる、現れる」、「火がツク」の場合には「ともる」などが考えられ、それぞれの意味を取り巻く関連語が異なっていることがわかる。

しかも、このような「ツク」の複数の意味は、「ツク」のただ一つの一般的な意味が文脈的に変容したものであるとは考えられない。池上（1975：135-136）は、暫定的に出された複数の意味についてある共通の意味次元が見出され、かつそれらの意味でその次元の全域が覆われるのなら、それら複数の意味は一つの一般的意味にまとめてよいとしている。しかし、上で観察されたような複数の意味

について、例えば「何らかの対象物の動き・変化」というような共通の意味次元を考えたとしても、「ツク」の複数の意味だけでその次元の全域を覆うことができるとは思われない。

従って本稿では、ここで分析の対象とする「ツク」は複数の異なる意味を持ち、しかもそれらの複数の意味は単義語のただ一つの一般的意味が文脈的に変容したものではないと考える。

2.2　多義語か同音異義語か

国広（1982：97）は「『多義語』(polysemic word）とは、同一の音形に、意味的に何らかの関連を持つふたつ以上の意味が結び付いている語を言う」と、また「『同音異義語』とは、同一の音形に、意味的に関連を持たないふたつ以上の意味が存在する場合に生じるふたつ以上の語のことである」と定義している。2.1節では「ツク」には複数の異なる意味が存在すると考えられることを述べたが、それらの意味の間には何らかの意味的な関連があると考えてよいだろうか。

ここでは諸種の辞書において、この「ツク」が見出し語としてどのように分類されているかを見てみる。別々の見出し語が立てられている場合には、それらの語は別々の同音異義語としてとらえられていることになるわけである。

まず『日本語基本動詞用法辞典』では「付く」「着く」「就く」「点く」の4語が別の見出し語として立てられている。また『三省堂国語辞典（第四版)』では「付く・附く」「着く」「就く」「即く」「点く」「憑く」の６語がそれぞれ別個に立てられている。また『外国人のための基本語用例辞典（第三版)』では「付く・ 着く」「着く・就く」「点く」の３語が見られる。これらの辞書においてはいずれも、それぞれの見出し語が互いに別個の同音異義語として扱われていることになる。

一方本稿で分析の対象とする「ツク」を一つの見出し語のもとにまとめ、互いに関連のある複数の意味を持つ一つの多義語として扱っているものには、『日本国語大辞典』(付・着・就・即・憑)、『基礎日本語辞典』(着・付・就)、『新潮国語辞典－現代語・古語－（第二版)』(付・附・着・著）(ただし「就・即・憑・点」の漢字表記もその下位分類の中に見られる)、『岩波国語辞典（第五版)』(ただしその大きな意味の下位分類としては「付・附」「着」「着・ 就・即」の三つに分けられている)、『新明解国語辞典（第四版)』(ただしその大きな意味の下位分類としては「付」「着」「就」「憑」「漬」の５つに分けられている）がある。

多義語か同音異義語かを区別する基準として、国広（1982：107-108）は「語源は無関係であり、中心的なものは意味の近親性に対する話し手の直観である」とし、また「同音意義と多義の現象は、本質的に連続しているのであり、境界を定めようとすることがそもそも無理なことであると考えるべきである」と述べている。上記で見たように、諸種の辞書においてこの「ツク」に関しそれぞれに異なる扱いがされているのも、「ツク」に見られる複数の意味を一つの語の多義として扱うのか、それとも別々の語による同音異義として扱うのか、その境界線を引くことの難しさを示しているものと思われる。

本稿では、ここで分析の対象とする「ツク」に見られる複数の意味については、それらの意味間の意味的な関連は大きいと考え、鈴木（1997）において「ツク」（突・衝・撞・搗・吐）を一つの多義語として扱い分析したのと同様に、「ツク」（付・着・就・即・憑・点）についてもこれを一つの多義語とみなす立場をとる。そして、この「ツク」（付・着・就・即・憑・点）の意味分析を通して、逆にそこに観察される複数の意味の間には互いに意味的な関連が見出されるということを明らかにしていくことにする。

なお本稿の考察にあたっては300余りの実例を採取し検討を行った。しかし紙幅の都合上、本稿の例文には全て作例を用いる。分析の対象とする動詞「ツク」（付・着・就・即・憑・点）については「ツク」とカタカナで表記する。

3　スキーマ的意味の抽出とその関係付け

［1］－1：〈ある対象物が〉〈別のある対象物に〉〈物理的に〉〈触れ〉〈そこにとどまる〉

(1)　服にごみがツク。

(2)　家具に埃がツク。

(3)　彼女の携帯には赤いストラップがツイテいる。

(4)　アドレスの最後に「.jp」がツク。

(5)　Aセットにはデザートがツク。

(6)　この部屋にはエアコンがツイテいない。

(7)　あの大学には附属の小学校がツイテいる。

これはいわゆる物理的な「付着」の意味を表すものである。例(6)(7)ではそこに〈とどまる〉という意味がむしろ重要となり、いわゆる「付属」の意味となる。

［1］－2：〈ある対象物が〉〈別のある対象物に〉〈心理的に〉〈触れ〉〈そこにとどまる〉

(8)　契約には厳しい条件がツク。

(9)　骨董品にかなりの値がツイタ。

(10)　彼には立派な肩書きがツイテいる。

［1］－1と同様に「付着」あるいは「付属」の意味を表すが、ここではそれは〈心理的〉なものである。

［1］－3：〈ある対象物が〉〈別のある対象物の〉〈そばに〉〈物理的に〉〈寄り〉〈そこにとどまる〉

(11)　列の一番後ろにツク。

(12)　妻の買い物にツイテ行く。

(13)　野良犬が私の後にツイテ来た。

(14)　気ばかり焦っても体がツイテいかない。

ここでは［1］－1に見られるような「接触」あるいは「付着」の意味は弱い。この場合には〈物理的に〉別のある対象物に〈触れ〉ているのではない。直接に対象物に触れるのではなく、むしろここでは「接近」あるいは「近接」の意味が表されている。対象物そのものにではなく、それを取りまくある一定の範囲、エリア内に触れ、そこにとどまることを表すと言える。また例(14)の場合には、その動きは完全に物理的なものとは言い切れず、かなり心理的にとらえられたものとなっており、次の［1］－4の意味とも連続的である。

［1］－4：〈ある対象物が〉〈別のある対象物の〉〈そばに〉〈心理的に〉〈寄り〉〈そこにとどまる〉

(15)　カリスマ美容師にお客がツク。

(16)　皆が彼の側にツキ、孤立無縁となった。

［1］－3で見られた「接近」「近接」の意味がここでは〈心理的〉なものとなる。客がある特定の美容師に「ツク」のは、物理的な動きよりはむしろ心理的な動きを表すものと思われる。また皆が彼の側に「ツク」のも、その物理的な動きではなく、むしろ〈心理的に〉その〈そばに〉〈寄り〉〈とどまる〉動きであると考えられる。またこの意味は、次の［1］－5で見るような、ある「働き」を目的とする接近の意味へと連続する。

［1］－5：〈ある対象物が〉〈別のある対象物の〉〈そばに〉
〈ある働きをするために〉〈物理的・心理的に〉〈寄り〉
〈そこにとどまる〉

(17)　大統領に護衛が７人ツク。
(18)　社長には運転手が一人ツク。
(19)　女優に専属の付き人がツク。
(20)　留学生には一人一人にチューターがツク。
(21)　先生にツイテ、ピアノを習う。

ここでの「接近」は、物理的なものであると同時に心理的なものでもあると考えられる。そしてそれは何らかの〈働きをする〉こと目的としてなされる。

「護衛」「運転手」「付き人」「チューター」は単に対象物の〈そば〉に〈寄〉るだけではない。その接近の目的は、護衛をする、運転をする、世話をする等、何らかの〈働きをする〉ことである。例(21)の場合にも、先生に「ツイテ」ピアノを習う時には、その先生の指導に従って練習を積んでいくという一種の〈働き〉をすることがその目的となる。物理的にも先生のもとに通うことになるが、心理的にもその先生に師事する意味となる。

［1］－6：〈ある対象物が〉〈別のある対象物の〉〈そばに〉
〈ある働きをするために〉〈物理的に〉〈寄り〉〈そこにとどまる〉

(22)　選手が一斉にスタートラインにツイタ。
(23)　選手が外野の守備にツク。
(24)　皆が食卓にツク。
(25)　国務長官が帰国の途にツク。

ここでは［1］－5よりも、物理的なある定められた位置を占めることがより明確となっている。しかしいずれもレースをスタートするため、相手チームの攻撃から守るため、食事をするため、国に帰るためという何らかの〈働きをする〉ことを目的に、スタートライン、守備位置、座席、帰りの道などの位置を占めることになる。

またこの意味には［1］－3（「列の一番後ろにツク」など）の意味との関連も見られる。両者の違いは、〈ある働きをするために〉という意味特徴を持つか否かである。また例(22)の場合には、選手がスタートラインそのものに物理的に接触することを表すとも考えられるため、その場合には［1］－1のように〈ある

対象物が〉〈別のある対象物に〉〈ある働きをするために〉〈物理的に〉〈触れ〉〈そこにとどまる〉としてもよいかもしれない。

［1］－7：〈ある対象物が〉〈別のある対象物に〉〈物理的に〉〈触れ〉〈そこにとどまり〉〈影響を及ぼす〉

また［1］－1の意味と関連するものとして、以下のような意味があることも観察される。

(26)　稲に害虫がツク。

(27)　臭いが鼻にツク。

ここでは対象物への接触のみならず、その接触が対象物に何らかの〈影響を及ぼす〉という意味も表されてきている。害虫は稲に接触するだけでなく、稲に何らかの害を及ぼす。臭いも単に鼻の粘膜に触れるだけではなく、悪臭を感じさせるなどの何らかの影響を及ぼす。

［1］－8：〈ある対象物が〉〈別のある対象物に〉〈心理的に〉〈触れ〉〈そこにとどまり〉〈影響を及ぼす〉

(28)　村の娘に狐がツイタ。

(29)　だんだん運がツイテきた。

例(28)の場合には「狐」が「娘」に物理的に触れ、そこにとどまるかのように表現されてはいるが、実際には心理的な接触・付着とその影響とが考えられた例である。また例(29)のように心理的に「運」が接触・付着し、対象物に好影響をもたらす場合も考えられる。この場合は、ガ格を伴わずに「(僕は) 最近ツイテいる」のようにも使われる。

［1］－9：〈ある対象物が〉〈別のある対象物へ〉〈物理的に〉〈向かい〉〈そこにとどく〉

(30)　電車が駅のホームにツク。

(31)　5時間かかってようやく故郷の村にツイタ。

(32)　自宅に宅配便の荷物がツク。

(33)　浜辺に漂流物がツク。

ここでも［1］－1の接触・付着の意味との関連を見ることができる。しかしこの場合には、対象物に〈向かい〉〈そこにとどく〉ことが重要な意味特徴とな

り、いわゆる「到着」の意味が表されることになる。

電車、帰省する人、宅配便の荷物、漂流物などは、「駅」「故郷の村」「自宅」「浜辺」などに突然接触・付着するのではなく、そこに到るべくある方向からそれを目指して移動してきたものであると考えられる。

(34)(？) 差出人はわからないけど、荷物があるよ。

(35) 差出人はわからないけど、荷物がツイテいるよ。

例(34)のように「荷物がある」というのは、通常その荷物の「存在」自体が問題となる表現である。その荷物がどこかからこちらへ向かって送られてきたものであるということを特に問題とする表現ではない。従って「差出人はわからないけど」という表現とともに用いるのは、厳密に考えれば多少の不自然さを伴う[7]。このような場合には、むしろ「持ち主はわからないけど／誰のものかわからないけど」などと言う方が自然であろう。

一方例(35)のように、「荷物がツイテいる」と言った場合には、「差出人はわからないけど」という表現を付加しても不自然にはならない。これはこの場合の「ツク」に、ある対象物が別の対象物に〈向かい〉〈そこにとどく〉という意味があるゆえと考えられる。

［1］-10：〈ある対象物が〉〈別のある対象物へ〉〈ある働きをするために〉〈心理的に〉〈向かい〉〈そこにとどき〉〈とどまる〉

(36) 職にツク。

(37) 任務にツク。

(38) 重要な地位にツク。

(39) チャールズ２世が王位にツイタ。

［1］-９の特殊な場合としても考えられるものである。ここでニ格に立つ対象物は「職」「任務」「地位」「仕事」などである。

またこれは［1］-５（「大統領に護衛が7人ツク」など）の意味とも、また［1］-６（「選手が外野の守備にツク」など）の意味とも、〈ある働きをするために〉という意味特徴を共有しており、互いに関連があると考えられる。

ここでは、その仕事や任務などを遂行することが目的となり、そのような〈働きをするため〉に対象物に向かう。また仕事等の遂行が目的であるため、そこにとどき〈とどまる〉ものと考えられる。

(40)？大変な仕事を紹介してもらったので、これから激務の毎日が予想される。

(41)　大変な仕事にツイタので、これから激務の毎日が予想される。

例(40)のように仕事を紹介したもらっただけなのであれば、そこから「激務になる」ことまでが予想されるとするのは不自然である。しかし仕事に「ツク」のはその仕事を遂行する〈働きをするため〉のものであるため、その仕事が大変なものであれば例(41)のように「激務になる」ことが予想されると言っても不自然ではない。

また、対象物である「職」「任務」「地位」「仕事」などへ〈心理的に〉〈向か〉うものであることは、例えば以下のような例を考えてみるとわかる。

(42)？仕事をすることなど考えてもいなかったのだが、ある日突然仕事にツイタ。

(43)　仕事をすることなど考えてもいなかったのだが、ある日突然仕事をすることになった。

例(42)のように「考えて」もおらず、その仕事へと〈心理的に〉〈向か〉っていなかったのであれば、ある日突然「仕事にツイタ」とは言いにくい。そのような場合には「ツク」を使わずむしろ例(43)のように「ある日突然仕事をすることになった」などとした方が自然である。

［2］－1：〈ある対象物に〉〈物理的に〉〈変化が生じた結果〉
〈別のある対象物が〉〈そこに現れる〉

(44)　テーブルに傷がツク。

(45)　服にしみがツク。

(46)　庭の薔薇の木につぼみがツイタ。

(47)　預けておいたお金にわずかながら利息がツイタ。

［1］－1の接触・付着の意味との関連が考えられる興味深い例である。ここでは［1］－1と同様に、一見「傷」あるいは「しみ」という対象物が、「テーブル」「服」という別の対象物に物理的に接触・付着することが表されているように見える。

しかし、よく考えてみると「傷」あるいは「しみ」というのは、「テーブル」あるいは「服」と別にあらかじめ存在していた対象物ではない。「傷」はテーブルに何かがぶつかったりこすれたりした結果生じたものであり、また「しみ」は服に何かがさわったりこぼれたりした結果できたものである。これらの例においてガ格で示される対象物は、ニ格で示される対象物に何らかの変化が生じた結果、

そこに現れたものとなっている。

例(46)(47)についても、「つぼみ」は薔薇の木と別個に存在していたのではなく、薔薇の木に何らかの変化が生じた結果、そこに現れ出たものである。「利息」は預けていたお金と別のところからもたらされたのではなく、元金に変化が生じた結果、その増えた分が「利息」となったものと考えることができる。

［2］－2：〈ある対象物に〉〈心理的に〉〈変化が生じた結果〉
〈別のある対象物が〉〈そこに現れる〉

(48)　教養が身にツク。

(49)　学生達に実力がツイテきた。

(50)　話し方に変な癖がツイタ。

(51)　歳とともに貫禄がツイテきた。

ここでは［1］－2の心理的な接触・付着（「条件がツク」「値がツク」など）の意味との関連が見られる。しかしここでもまた上記の［2］－1（「テーブルに傷がツク」「服にしみがツク」など）との並行的な分析が可能である。

ここでもやはりガ格で示される対象物は、ニ格で示される対象物と別個に初めから存在していたものであるとは考えにくい。「身」「学生達」「話し方」などに何らかの変化が生じた結果、そこに現れたものが「教養」「実力」「癖」なのであると考えることができる。様々な経験の蓄積あるいは知識の吸収の結果、対象物の「身」に現れたものが「教養」であり、学習の結果、その「学生達」において認められるようになったものが「実力」であり、また何度も繰り返された結果「話し方」に変化が生じ、それが「癖」として見られるようになる。あるいはまた年齢とともにある人物に変化が生じ、その結果が「貫禄」となって認められるようになる。

ここで見た［2］－1および［2］－2の意味は、ある対象物がそこに〈現れる〉という意味特徴を持つという点で、次に見る［3］の各意味とも関連が見られる。

［3］－1：〈ある対象物が〉〈心理的に〉〈現れ〉〈知覚される〉[8]

(52)　想像がツク。

(53)　予想がツク。

(54)　察しがツク。

(55)　あの双子はとてもよく似ていて私には区別がツカない。

ここで〈心理的に〉〈現れ〉〈知覚される〉対象物とは「予想」「予測」「想像」「差」「区別」「察し」などである。

この意味は、［2］-2（「教養が身にツク」「話し方に癖がツク」など）の意味とは〈ある対象物が〉〈心理的に〉〈現れる〉という意味特徴を共有している。両者の違いは、ガ格で示される対象物が、二格で示される対象物における何らかの変化により現れたものと考えられるか否かである。しかし両者の間には連続性が見られ、例えば以下のような例も考えられる。

(56)　二人の選手の間に100メートルほどの差がツイタ。

(57)　どのようなトレーニングをするかによって、5年後の二人の選手の間には大きな差がツイテいるだろう。

例(56)で、二人の選手の間の「差」が、あるレースにおいて単に〈心理的に〉〈現れ〉〈知覚され〉たものだとすると、これはこの［3］-1の意味を表すものと考えることができる。しかし例(57)の方は、5年間のトレーニングによって「二人の選手」に何らかの変化が生じ、その結果「差」という対象物がそこに現れるのだと解釈することも可能である。すると同じ「差がツク」という表現であっても、例(57)の方はむしろ［2］-2の「学生達に実力がツク」などに近い意味を表すものと考えられることになる。

［3］-2：〈ある状態が〉〈物理的に〉〈現れ〉〈知覚される〉

また上記の［3］-1の意味が特殊化すると、以下のような意味との結び付きが見られるようになる。

(58)　夕方になると自動的に明かりがツク。

(59)　スイッチを入れたら壊れていたテレビがもう一度ツイタ。

この場合に〈物理的に〉〈現れ〉〈知覚される〉状態とは、明かりがともった状態であり、またテレビ映像の映っている状態である。

［3］-3：〈ある対象物が〉〈心理的に〉〈現れ〉〈物事が〉〈おさまる〉

(60)　決着がツク。

(61)　話がツイタ。

(62)　一段落ツク。

(63)　取り返しがツカない。

これは、［3］-1（「想像がツク」「区別がツク」など）の意味とは、〈ある対象物が〉〈心理的に〉〈現れ〉るという意味特徴を共有しており、互いに関連が深いものと思われる。ただしこの［3］-3では、ある対象物が心理的に〈現れ〉るだけではなく、そのことから〈物事が〉最終的なまとまりを見せ、〈おさまる〉ことまでが意味される。ただし両者の間には分類の難しい連続的な例も見出される。

(64)　これで説明がツク。

(65)　調べがツイタ。

例えば上記の例(64)(65)の場合に、「説明」あるいは「調べ」という対象物が〈心理的に〉〈現れ〉〈知覚され〉ただけであるのか、あるいはそこから〈物事が〉〈おさま〉ったことまでが意味されるのかを厳密に区別することは難しい。またこの意味は、［1］-9の〈ある対象物が〉〈別のある対象物へ〉〈物理的に〉〈向かい〉〈そこにとどく〉（「電車が駅のホームにツク」「自宅に荷物がツク」など）の意味とも関連があると思われる。［1］-9に見られる〈そこにとどく〉という意味を「終点／目的の点に達する」ことであると解釈すれば、ここでの最終的に〈物事が〉〈おさまる〉という意味との関連を見出すことができる。

以上本稿では、「ツク」（付・着・就・即・憑・点）という動詞に見られるスキーマ的な意味を抽出し、互いに関連付ける試みを行った。今後このネットワーク構造をより詳細化し、さらにこのようなネットワーク構造におけるプロトタイプ的意味についても、考察を進めていく予定である。

注

(1)　この動詞「ツク」の漢字表記は、「付・着・就・即・憑・点」の6種類にまとめられると考えられる。『同音語同訓語使い分け辞典』及び『岩波国語辞典（第五版）』には「附」という漢字表記も見られるが、これについては「今は統一的に『付』を使う」（北原・鳥飼（1995：264））との但し書きが見られる。また『新潮国語辞典－現代語・古語－（第二版）』には「著く」、『同音語同訓語使い分け辞典』には「蹤」「跟」という漢字表記も見出しに挙げられてはいる。しかし、いずれもその表記を用いた実際の例文は挙げられていない。

(2)　接尾辞「～つく」については、森田（1989：732）に、また柴田他（1976：32-38）に「ぶらつく」「うろつく」の分析が見られる。また姫野（1975：55）も、多くの複合語を形成する「～つく」の複合の一形態として「擬声・擬態

語＋つく」を挙げている。

(3)　国立国語研究所(宮島)（1972）では、「ツク」と意味的な関連を持つ「とどく、いたる、達する」などの動詞が示され、また「(ある場所へ）出る」という動詞との違いが分析されるなど、異なる観点からの記述がなされている。

(4)　ここで言う「スキーマ」的な意味とは、Langacker（1987，1988）における“schematic network”のモデルに基づき、より抽象化及び一般化の度合いの高い、即ち特定化及び詳細化の度合いの低い意味のことを指す。

(5)　本稿は、「ツク」（付・着・就・即・憑・点）という動詞の共時的な意味分析を目的としたものである。従ってここでこの動詞の複数の意味を「相互に関係付ける」とするのは、通時的な観点からその拡張の“順序”を追っていくことを意味するものではない。

(6)　ここでの「ネットワーク構造」とは、注(4)に示した“schematic network”のモデルのことである。

(7)　文頭の？は、その文が不自然であることを示す。ただしこの場合は、不自然ではないと感じられる状況を想定することも不可能ではないため、(　)を付した。

(8)　本稿では分析の対象としないが、「ざわつく」「うろつく」「がたつく」などに見られる「(ざわざわ、うろうろ、がたがたなどにより示されるような）ある状態が生じる、現れる」という意味も、この意味との関連があるのではないかと思われる。

引用文献

池上嘉彦（1975）『意味論』　大修館書店

大野　晋・浜西正人（1993）『類語国語辞典（第七版)』　角川書店

北原保雄・鳥飼浩二（1995）『同音語同訓語使い分け辞典』　東京堂出版

金田一京助・柴田　武・山田明雄・山田忠雄編（1989）『新明解国語辞典（第四版)』　三省堂

国広哲弥（1982）『意味論の方法』　大修館書店

見坊豪紀・金田一京助・金田一春彦・柴田　武・飛田良文編（1992）『三省堂国語辞典（第四版)』　三省堂

小泉　保・船城道雄・本田畠治・仁田義雄・塚本茂樹編（1989）『日本語基本動詞用法辞典』　大修館書店

国立国語研究所（宮島達夫）（1972）『動詞の意味・用法の記述的研究』 秀英出版

柴田　武・国広哲弥・長嶋善郎・山田　進（1976）『ことばの意味1－辞書に書いてないこと』 平凡社選書

鈴木智美（1997）「多義語『ツク』（突・衝・撞・搗・吐）の意味分析」『名古屋大学人文科学研究』第26号　名古屋大学大学院文学研究科　pp.165-191

西尾　実・岩淵悦太郎・水谷静夫編（1994）『岩波国語辞典（第五版）』 岩波書店

日本大辞典刊行会編（1975）『日本国語大辞典』第13巻　小学館

姫野昌子（1975）「複合動詞・『～つく』『～つける』」『日本語学校論集』第２号　東京外国語大学外国語学部附属日本語学校　pp.52-71

文化庁（1990）『外国人のための基本語用例辞典（第三版）』 文化庁

町田　健・籾山洋介（1995）『よくわかる言語学入門』 バベル・プレス

森田良行（1989）『基礎日本語辞典』 角川書店

山田俊雄・築島　裕・小林芳規・白藤禮幸編修（1995）『新潮国語辞典－現代語・古語－（第二版）』 新潮社

Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar*. Vol. 1, *Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.

Langacker, Ronald W. 1988. “A View of Linguistic Semantics.” In Brygida Rudzka-Ostyn (ed.) *Topics in Cognitive Linguistics*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company, pp. 49-90.

On the Meaning of the Japanese Polysemic Verb *tsuku*

SUZUKI Tomomi

This paper describes the meaning of the Japanese polysemic verb *tsuku*.

Although many Japanese dictionaries list a variety of detailed meanings of this verb, little attention has been given to the relationships among them.

Here, as a first approximation to solving this problem, I focus on extracting some relatively schematic (abstract and general) meanings of this verb and their interrelationships. Such schematic meanings provide cognitively salient and conventionally entrenched nodes of the semantic network (polysemic structure) of this verb.

Through elaboration and specialization of schematic meanings and their relationships, we can grasp a whole semantic structure or "network" of this polysemic verb.